

# オホーツクの農業2019

*Agriculture in Okhotsk*

## (目次)

I	オホーツクの概要	1
II	オホーツクの農業の概要	3
III	農業構造	5
IV	農業の担い手	8
V	農産	12
VI	酪農・畜産	21
VII	食の安全・安心、付加価値向上	25
VIII	加工	28
IX	農業農村整備事業	31
X	農業関係機関	33
XI	農業関係団体	35
XII	オホーツク総合振興局農業関係部署の概要	37



## トピックス ~~~~~

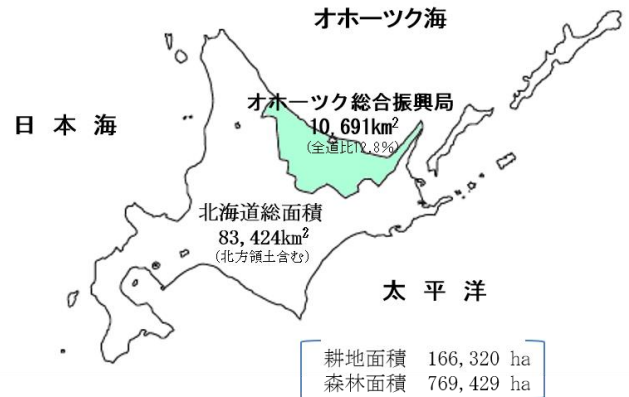
- ① 『オホーツク農業の未来につなぐ! 「SyuNoh」推進事業』について . . . 7
- ② オホーツク・スマート農業セミナーの開催について . . . 24

# I オホーツクの概要

## 1 位 置

オホーツク地域（オホーツク総合振興局管内）は、北海道の北東部に位置し、オホーツク海と 280km の海岸線で接しており、南北に約 80km、東西に約 200km の広がりがあります。総面積は 10,691km<sup>2</sup>（秋田県に匹敵）と全道の 12.8% を占め、宗谷・上川・十勝・釧路・根室の各総合振興局・振興局と境界を接しています。

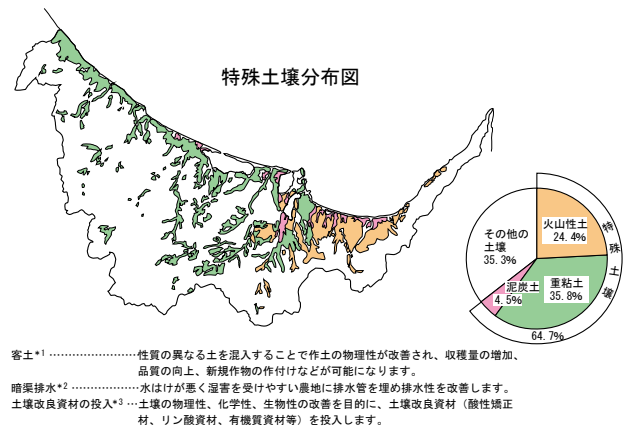
管内は、比較的なだらかな起伏に富み、オホーツク海岸部から南西及び南東に向かって標高が段階的に上昇しています。オホーツク海沿岸部には平地が多く、海岸から平行して低地・台地・丘陵地・山地という基本的な配列となっています。



## 2 土 壤

管内は、道内で最も多様な農地の土壌種類が分布している地域であり、特殊土壌と呼ばれる泥炭土、火山性土及び重粘土が大半を占めています。

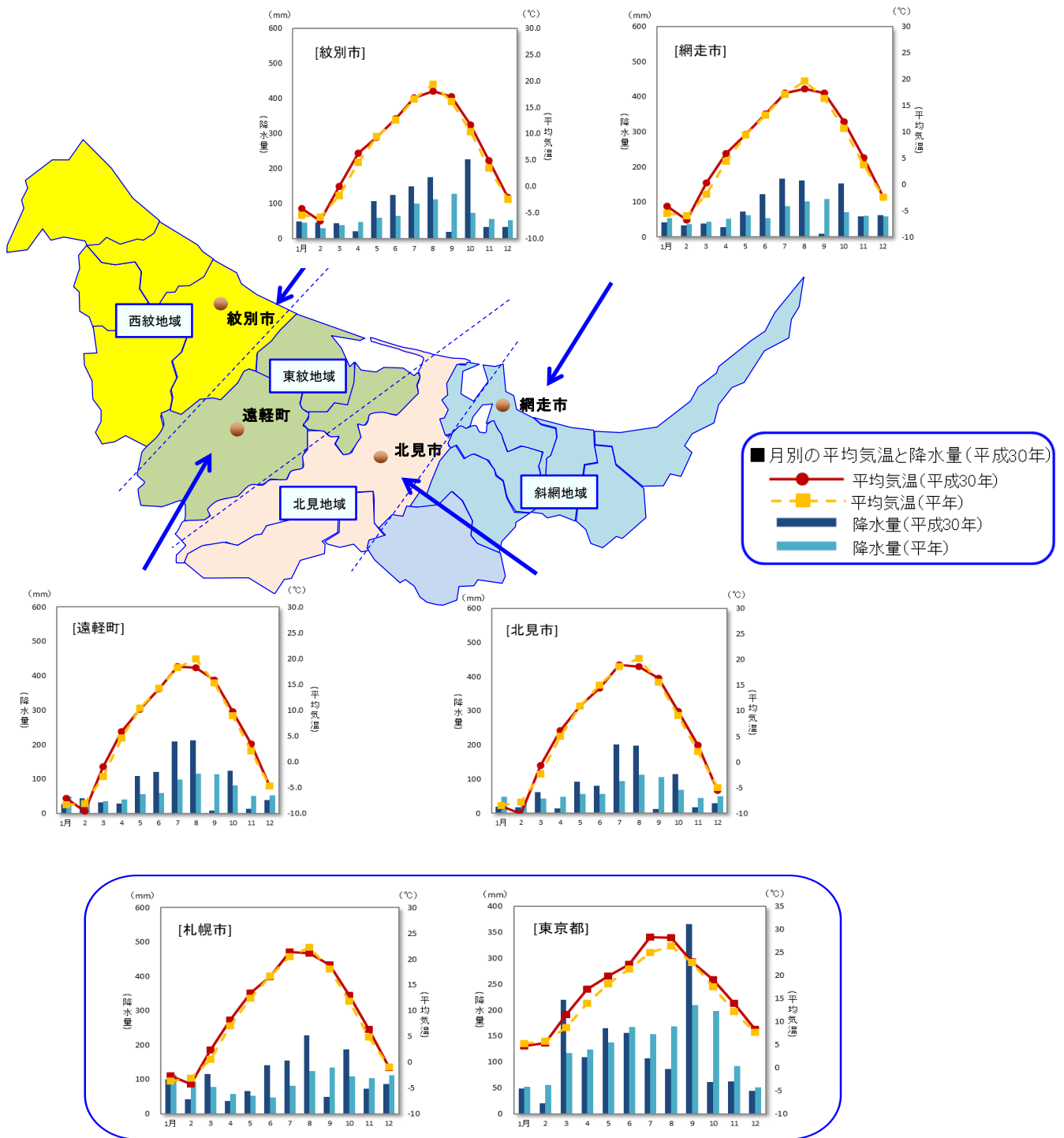
これらの特殊土壌は冷涼な気候とともに作付作物を制限し、生産性を低下させる大きな要因となってきましたが、主に戦後になってからは、客土\*1、暗渠排水\*2、土壌改良資材の投入\*3等、農地を改良する努力が続けられ、その結果、近年では、まだまだ改良の余地があるものの他の地域に劣らない生産性の高い農業が営まれています。地域別に見ると、網走・北見・置戸を結ぶ線の西側が重粘土地帯、東側が火山性土地帯に大別され、地下水位が高い低地に泥炭土が散在している形態となっています。



## 3 気 象

管内の平均気温は5～6度で、道内では宗谷、根室地方に次いで低くなっていますが、農耕期間の気温は15～16度とこれらの地域より高く、畑作を中心とした低温に適応する農作物の生産が可能で、積算気温が比較的高い内陸部では、稲作が営まれているところもあります。しかし、気象の変動が大きく、オホーツク海高気圧の出現などによって極端な低温や日照不足による度々の冷害、遅霜（平年終霜5月10日前後・平年初霜10月20日前後）、また春先の強い南西風による風害など、農業にとって厳しい気象条件下にあります。年間の降水量は、600～800mmで、全道で最も少ない地域となっており、積雪量は70cm前後で全道的に少ない地域となっています。

平成30年は平年より融雪が早く、4月も好天が多かったため、てん菜の移植や馬鈴しょの植付作業は平年よりやや早く進みましたが、6月に入ると曇りや雨の日が多くなり生育は次第に停滞しました。7月には温帯低気圧の影響により北見市などで浸水などの農業被害が発生した、また、前線の通過などにより低温、多雨、寡照となり生育が停滞しました。8月から9月にかけては好天と曇天を繰り返し、水稻や豆類など一部の作物で生育が回復せず、収穫は遅れました。収量については、水稻や小麦は平年を下回り、玉ねぎや馬鈴しょはほぼ平年並みとなりました。



## 4 人 口

管内の人口は、昭和 35 年は、約 42 万 5 千人余りでしたが、昭和 50 年代の一時期を除いて減少が続いており、平成 27 年は約 29 万 4 千人と昭和 35 年の 7 割程度となっています。

市部と町村部に分けてみると、北見・網走・紋別の三市における人口は、約 18 万 3 千人と管内人口の約 6 割を占めます。

一方、町村部における人口は、約 11 万人となっており、中には平成 22 年から 27 年の 5 年間の人口減少率が 11%を超えるところもあるなど、過疎化が進行しています。

また、年齢別人口で見ると、管内の老年人口(65 歳以上人口)は 31.6%となっており、高齢化も進行しています。

## Ⅱ オホーツクの農業の概要

### 1 北海道農業に占めるオホーツク農業の割合

区 分 (単 位)	オホーツク	北海道	対北海道比 (%)	調査年次
耕地面積 (ha)	166,300	1,145,000	14.5	H30
田 (ha)	1,620	222,200	0.7	H30
畑 (ha)	164,500	922,300	17.8	H30
農家人口 (人)	12,508	96,557	13.0	H27
農家戸数 (戸)	4,641	44,433	10.4	H27
販売農家 (戸)	4,306	38,086	11.3	H27
専業農家 (戸)	3,326	26,597	12.5	H27
兼業農家 (戸)	980	11,489	8.5	H27
作付面積				
水稲 (ha)	1,010	104,000	1.0	H30
小麦 (ha)	29,000	121,400	23.9	H30
大麦 (ha)	1,190	1,660	71.7	H30
てん菜 (ha)	23,000	57,300	40.1	H30
大豆 (ha)	2,370	40,100	5.9	H30
馬鈴しょ (ha)	16,600	50,800	32.7	H30
たまねぎ (ha)	7,903	14,700	53.8	H30
収穫量				
水稲 (t)	4,520	514,800	0.9	H30
小麦 (t)	132,800	471,100	28.2	H30
大麦 (t)	4,130	5,540	74.5	H30
てん菜 (t)	1,454,000	3,611,000	40.3	H30
大豆 (t)	6,070	82,300	7.4	H30
馬鈴しょ (t)	641,700	1,742,000	36.8	H30
たまねぎ (t)	453,930	717,400	63.3	H30
飼養頭羽数				
乳用牛 (頭)	110,591	790,900	14.0	H30
(1戸当たり) (頭)	128.4	128.8	99.7	H30
肉用牛 (頭)	68,740	524,500	13.1	H30
(1戸当たり) (頭)	210.2	204.1	103.0	H30
生乳生産量 (t)	569,750	3,965,193	14.4	H30

資料：農林水産省「耕地面積調査」、「作物統計調査」、「畜産統計調査」、「牛乳乳製品統計調査」  
「農林業センサス」

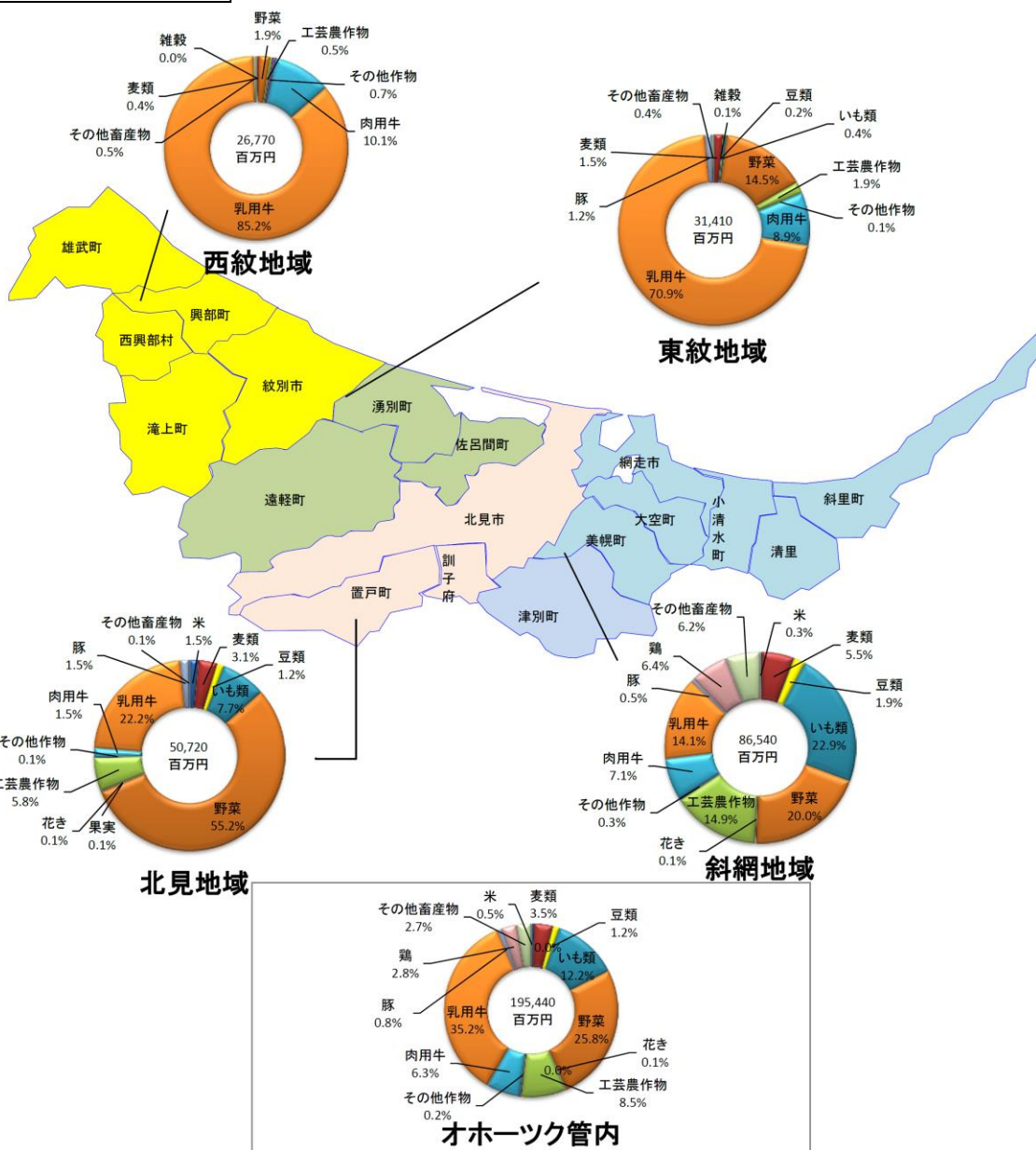
\*一部「オホーツク総合振興局調べ」

### 2 地域別農業の特色

管内は気象条件・土地条件などの自然的条件と経済的條件の違いによって斜網・北見・東紋・西紋の4地域に大別され、それぞれの条件を生かし、地域ごとに特色ある農業が展開されています。

斜網地域 (網走市・大空町・美幌町・津別町・斜里町・清里町・小清水町)	てん菜・馬鈴しょ・麦類を中心に機械化された大規模な畑作農業を展開する地域であり、斜網地域だけで管内農業産出額の耕種部門の56%を占めます。
北見地域 (北見市、訓子府町、置戸町)	たまねぎ等の野菜を基幹として、水稲・酪農などの生産性の高い農業を展開する地域で、特にたまねぎは全道収穫量の63%を占める大産地です。1戸当たり耕地面積は25.0haと狭いものの、10a当り農業産出額では142千円と管内トップです。
東紋地域 (佐呂間町、湧別町、遠軽町)	酪農を基幹として、たまねぎ・かぼちゃ・ブロッコリー・アスパラガス等の野菜や青しそ等の特用作物などに取り組み、工夫をこらした農業を展開する地域です。1戸当たり耕地面積は39.3haと酪農地帯としては狭く、1戸当たり農業産出額は管内平均と同程度です。
西紋地域 (紋別市、滝上町、興部町、西興部村、雄武町)	草地等の土地基盤を活用した大規模な酪農を展開しており、1戸当たり耕地面積は85.2haと管内では最も大きい地域です。農業産出額に占める畜産の割合は96%を超え、1戸当り農業産出額は7千5百万円と管内平均を大きく上回ります。

農業産出額の品目別割合 (平成30年)



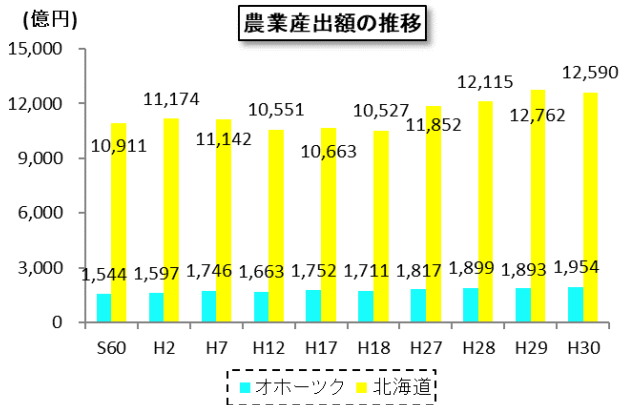
地域別農業統計等の比較

区分	オホーツク総合振興局	斜網地域	北見地域	東紋地域	西紋地域
農家戸数 (H 27)	4,641 戸	2,195 戸	1,426 戸	666 戸	354 戸
耕地面積 (H 30)	166,300 ha	74,290 ha	35,680 ha	26,200 ha	30,150 ha
1戸当たり耕地面積 (参考)	35.8 ha	33.8 ha	25.0 ha	39.3 ha	85.2 ha
農業産出額 (H 30)	195,440 百万円	86,540 百万円	50,720 百万円	31,410 百万円	26,770 百万円
うち畑作	49,800 百万円	39,230 百万円	9,020 百万円	1,290 百万円	260 百万円
うち酪農	68,710 百万円	12,230 百万円	11,250 百万円	22,250 百万円	22,980 百万円
うち野菜	50,390 百万円	17,320 百万円	28,000 百万円	4,560 百万円	510 百万円
1戸当たり農業産出額 (参考)	42,112 千円	39,426 千円	35,568 千円	47,162 千円	75,621 千円
10a当たり農業産出額 (参考)	118 千円	116 千円	142 千円	120 千円	89 千円

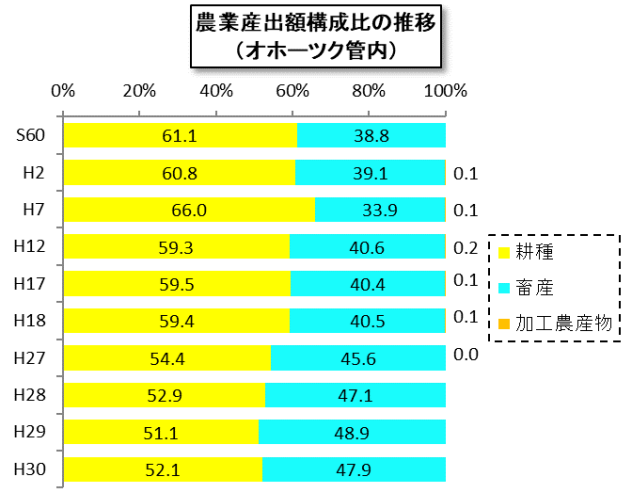
資料：農家戸数/農林水産省「農林業センサス」 耕地面積/農林水産省「耕地面積調査」  
 農業産出額/農林水産省「市町村別農業産出額(推計)」  
 1戸当たり耕地面積及び農業産出額、10a当たり農業産出額は上記データから算出  
 注1)：農業産出額の「うち畑作」は麦類・雑穀・豆類・いも類・工業農作物。  
 注2)：ラウンドの関係で、オホーツク総合振興局と各地域の合計は必ずしも一致しない。

### 3 農業産出額

管内の農業産出額は、平成30年は1,954億円となりました。農業産出額の構成比は、耕種、畜産ともに約5割となり、畜産は増加傾向で推移しています。



資料：農林水産省「生産農業所得統計」、「市町村別農業産出額（推計）」

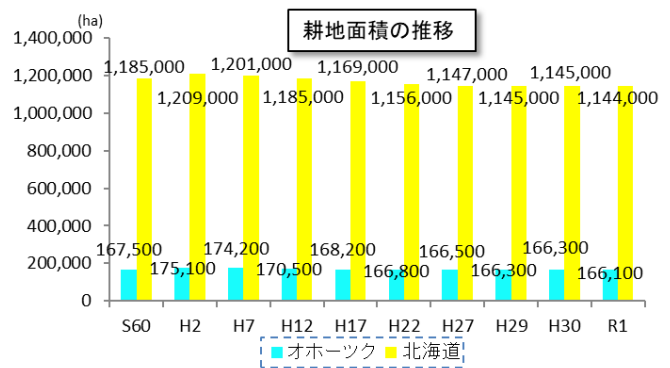


資料：農林水産省「生産農業所得統計」、「市町村別農業産出額（推計）」

## Ⅲ 農業構造

### 1 耕地面積

耕地面積は、北海道・管内ともに微減傾向にあります。令和元年の管内の耕地面積は166,100haとなっています。

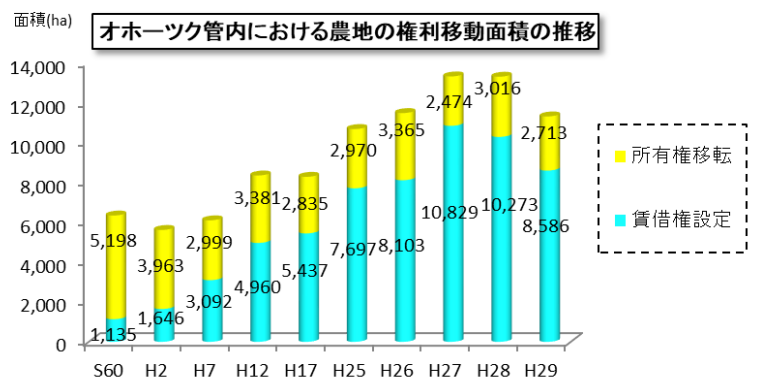


資料：農林水産省「耕地面積調査」

### 2 農地の権利移動

管内における耕作目的の農地の権利移動面積は、平成7年まで横ばいに推移していましたが、平成12年度以降、農地法の改正により農地権利移動の規制が緩和されるとともに、農業経営基盤強化促進法の改正により担い手への農地利用集積に向けた措置が拡充され、平成26年度には農地中間管理事業の推進に関する法律に基づく農地中間管理事業が開始されたことにより、増加傾向で推移してきましたが、担い手への農地の集積率が高まり、平成29年度では権利移動が前年度に比べ減少しています。

このうち、農業経営基盤強化促進法に基づく農地の権利移動が主体となっており、平成29年では全体の8割近くを占めています。



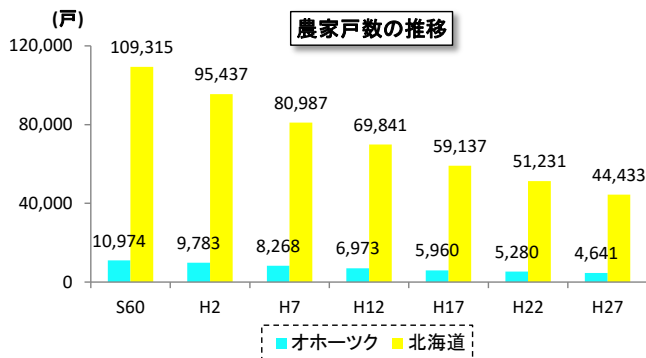
資料：農林水産省「農地の権利移動・賃借等調査」

注) 農地の権利移動面積は、農地法第3条、農業経営基盤強化促進法、農地中間管理事業の推進に関する法律に基づく、農地及び採草放牧地の所有権移転面積と賃借権設定面積である。

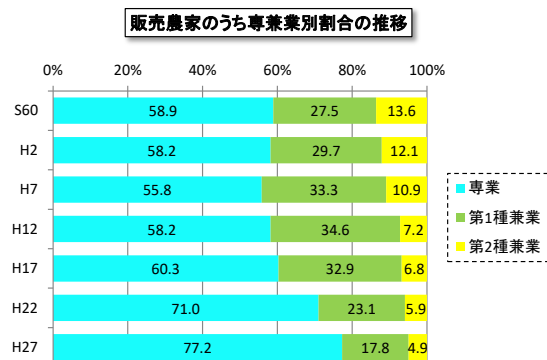
### 3 農家戸数

農家戸数は、北海道・管内ともに減少を続けています。

また、専業別で見ると、専業農家が平成7年以降増加傾向にあり、専業農家及び第1種兼業農家が全体の約95%を占めています。



資料：農林水産省「農林業センサス」「農業構造動態調査」

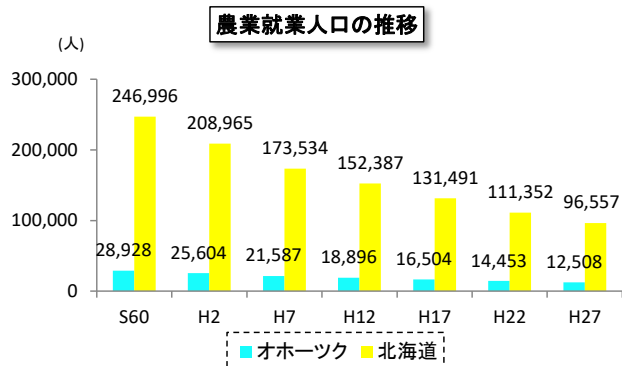


資料：農林水産省「農林業センサス」「農業構造動態調査」

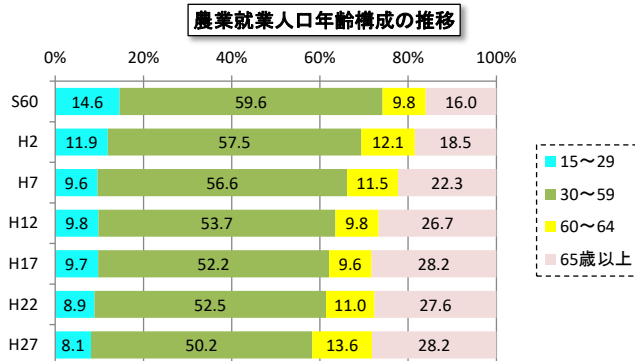
### 4 農業就業人口

農業就業人口は、北海道・管内ともに減少を続けています。管内では、平成27年は1万2,500人となり、昭和60年の約4割まで減少しています。

また、年齢構成は60歳以上が昭和60年以降増え続けていることから、高齢化が見られ、平成27年には60歳以上が41.8%を占めています。



資料：農林水産省「農林業センサス」「農業構造動態調査」



資料：農林水産省「農林業センサス」「農業構造動態調査」

## トピックス①【『オホーツク農業を未来に繋ぐ！「SyuNoh」推進事業』について】

管内の農家戸数は、15年前と比較して30%以上減少する一方で、1戸あたりの耕作面積は、離農跡地を引き受けることで拡大が進んでいます。しかし、人手不足などから離農跡地の引き受けも限界があり、今後遊休農地の発生が懸念されるほか、農村地域からの人口減少から、農村の集落機能の低下が懸念されています。

そこで、オホーツク農業の持続的な発展と、農村の集落機能やコミュニティの維持のため、一層新規就農者の受入拡大が必要であることから、令和元年度から振興局独自事業として『オホーツク農業を未来に繋ぐ！「SyuNoh」推進事業』を発足しました。

事業の取組として、市町村、各農業協同組合、北海道農業協同組合中央会北見支所、オホーツク農業協同組合連合会及び日本政策金融公庫北見支店を構成員とした「オホーツク新規農業者対策会議」を立ち上げ、管内一体的な新規就農者受入のための情報共有・連携体制の構築を目指しています。

具体的な活動内容としては、道外における就農相談会等に出展し、北海道農業協同組合中央会北見支所及びオホーツク農業協同組合連合会と連携し、オホーツクにおける新規就農についてPRを行いました。

また、令和2年1月には、東京農業大学オホーツクキャンパスにおいて、東京農業大学生物産学部と日本政策金融公庫との共催により「オホーツク新規就農セミナー in 東京農大」を開催しました。

セミナーでは、学生との交流を求める農業者が集まって設立した「オホーツクの大学生と農業経営者の会」がお披露目され、学生はオホーツク農業の魅力を知り、農業者は学生の発想力や研究の場を商品開発や6次化推進につなげることができる等、農業者と学生がお互いの強みを活かした交流ができる会が誕生しました。

当日は、管内における新規就農者の講演やパネルディスカッションも行われ、多くの学生がオホーツク農業と新規就農をリアルに感じることができる機会になりました。

今後の取組としては、道内外に向けた「オホーツク農業の魅力」の発信だけでなく、受入側へのサポートも重要であることから、市町村や農業協同組合に向けた第三者経営継承等について研修会を開催する等、受入側の体制構築を実施していく予定です。



東京で開催された就農相談会の様子



東農大セミナー パネルディスカッションの様子



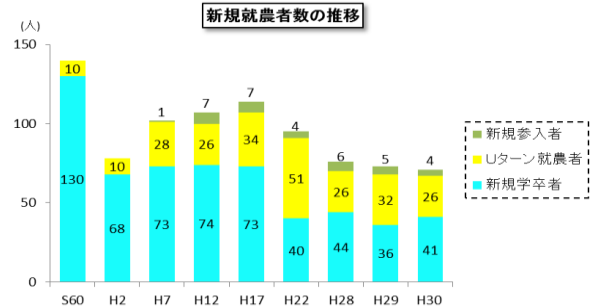
## IV 農業の担い手

### 1 新規就農者

管内の新規就農者数は、近年、60人程度で推移しており、平成30年は71人となっています。

新規就農者のうち、「新規学卒就農者」は、平成17年以降は減少傾向で推移していましたが、平成30年は41人と前年に比べて5人の増加となりました。

また、「Uターン就農者」は、平成23年頃まで、社会・経済情勢を背景とした農業や農村生活への関心の高まりの中で増加傾向でしたが、平成28年以降は30人前後で落ち着いており、平成30年は26人となりました。



資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

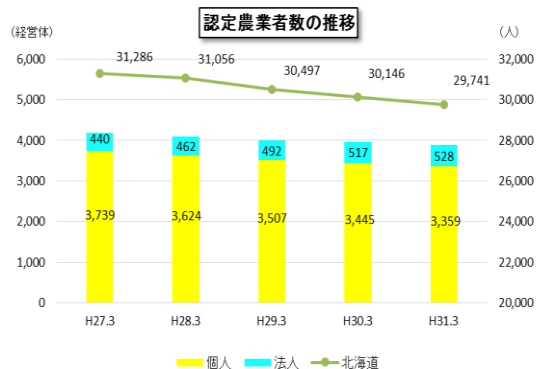
- 注1) 「新規学卒就農者」とは、農家出身者で学校を卒業後、直ちに就農した者  
 注2) 「Uターン就農者」とは、農家出身者で他の産業に従事した後、就農した者  
 注3) 「新規参入者」とは、非農家出身者で新たに農業経営を開始した者

### 2 認定農業者

管内の認定農業者数は、平成31年3月末時点で、3,887経営体となっています。

近年の認定農業者数は、高齢化等を背景に減少傾向で推移していますが、認定農業者のうち法人の数は、前年と比べ、11法人増加し、528法人と年々増加する傾向にあります。

国の農業経営に関する各種施策等は、認定農業者を主とする「担い手」に集中・重点化しています。



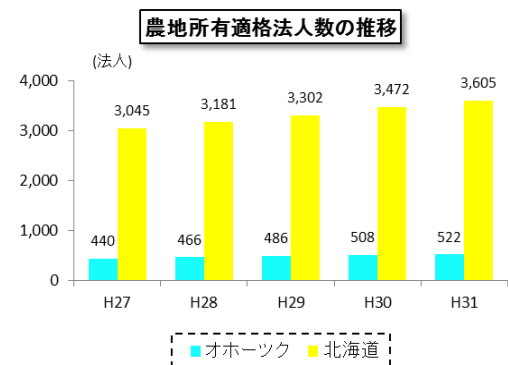
資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

### 3 農地所有適格法人

管内の農地所有適格法人数は、増加傾向にあり、平成31年1月1日時点で522法人となっています。

農業経営の法人化は、家計と経営の分離により経営管理能力や対外信用力が高まるほか、給与制、休日制及び社会保険などの整備により優れた人材を確保しやすく、規模拡大や経営の多角化が容易になるなどのメリットを有しています。

特に近年、複数戸による農地所有適格法人には、地域の中核的な担い手として離農者などの農地や農作業の引き受け手、新規就農者の受け入れとなるなど、公益的機能の発揮が期待されています。



資料：オホーツク総合振興局農務課調べ (各年1月1日現在)

## 4 北海道指導農業士・北海道農業士

本道農業の発展と地域社会の活性化を図るため、次代の農業の担い手の受入・指導や地域農業の振興に対する助言・協力を行う優れた農業者を「北海道指導農業士」として、地域農業の振興等に積極的に参加協力を行う農業者を「北海道農業士」として、それぞれ市町村長の推薦を受けて知事が認定しています。

管内では、令和元年12月末現在で、指導農業士110名、農業士235名が認定されています。

## 5 農村女性グループ

管内では、簿記や経営管理の学習、農畜産物の直売や加工など、幅広い農村女性のグループ活動（平成30年3月現在、42グループ）が行われており、農業経営の改善をはじめ、消費者との交流や食文化の伝承など農業・農村への理解促進に貢献しています。

また、平成13年には、各グループの交流を目的としたオホーツク農村女性ネットワーク「kirari ウエルカム」が設立され、交流と学習の場である「農村女性のひろば」の開催など活動の輪が広がっています。

## 6 青年農業者クラブ

20代～30代前半を中心とした青年により構成される青年農業者クラブ（令和元年12月現在、16クラブ）は、交流会や学習会等の活動を通じて、農業経営・技術の向上や仲間づくりなどの自己研鑽のほか、地域農家への新技術の提案、子どもの農業体験指導にも取り組むなど、次代の担い手育成の場となっています。

## 7 地域農業支援システム

経営の規模拡大に伴う過重労働、担い手の減少、農作業従事者の高齢化などに対応し、労働負担を軽減するため、酪農を中心に農作業受託組織（コントラクター）やTMRセンター、酪農ヘルパー組合などの農作業支援組織整備が進められています。

### （1）コントラクター（農作業受託組織）

平成30年に管内で活動しているコントラクターは16組織あり、農業協同組合や株式会社、農事組合法人、営農集団など多様な形態で運営されています。

また、コントラクターでは、牧草や飼料用とうもろこしの収穫をはじめ、堆肥の切り返し・散布・耕起作業、心土破碎、草地更新作業など様々な農作業を請け負い、委託農家の労働力負担の軽減を図っています。

## (2) TMRセンター

TMRセンターは、酪農経営の規模拡大に伴い、飼料生産を外部化して乳牛管理に重点を置いた経営とするため、飼料生産からTMRの調整・供給までを行う組織で、良質粗飼料の安定的な確保を図り、構成する酪農家の経営改善を図ることを主な目的としています。

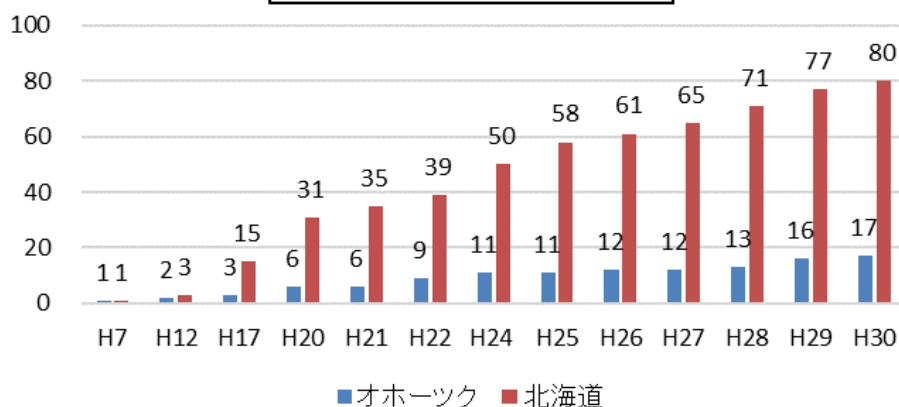
管内には平成31年3月現在、17組織が設立されており、近年増加傾向にあります。

TMRセンターの利用により、飼料の収穫・調製・給与に係る時間の短縮、良質なTMRの供給による1頭当たり乳量の増加など、一定の成果を上げています。

### ■管内TMRセンター一覧

TMRセンター名	開始年	市町村
(有)オコッペフィードサービス	平成10年	興部町
(農)東もことTMR	平成15年	大空町
(有)アグリサポートぱろう	平成18年	湧別町
(合)K'sフィードサービス	平成19年	訓子府町
(株)西興部グラスフィードファクトリー	平成19年	西興部村
(合)雄勝フィードサービス	平成22年	置戸町
(合)秋里TMRセンター	平成22年	興部町
(株)ドリームゆうべつ	平成23年	湧別町
JAサロマTMRセンター	平成24年	佐呂間町
(株)こしみずエコフィードサービス	平成24年	小清水町
(有)だいち	平成26年	津別町
(農)瑞穂	平成27年	北見市
(株)オホーツクTMRセンター	平成28年	興部町
(株)ほっくんフィードサービス	平成29年	訓子府町
(合)温根湯サイレンジサービス	平成29年	北見市
(合)Dream Feed Kitami	平成29年	北見市
U2デーリイコンシェル(株)	平成30年	興部町

TMRセンター組織数の推移



資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

### (3) 酪農ヘルパー利用組合

酪農ヘルパー利用組合は、酪農経営の厳しい労働条件を緩和し、定期的に休日を確保したり、病気・事故の際に、酪農家に代わって搾乳などの飼養管理を行うヘルパーを派遣する組織です。

管内では全市町村で16組合が組織され、利用組合参加率は95.5%となっています。

また、1戸あたり年間利用日数は23.7日と、前年に比べ0.7日減少しています。

#### ■酪農ヘルパー事業の実施状況（平成29年度）

	組合数	専任ヘルパー数 (人)	加入農家戸数 (戸)	加入率 (%)	1戸当たり年間 利用日数
オホーツク総合振興局	16	91	766	95.5%	23.7
北海道	86	503	5,117	91.3%	22.8

資料：(社)酪農ヘルパー全国協会調べ

### (4) 哺育・育成センター

哺育・育成センターは、酪農経営の規模拡大に伴い、哺育・育成部門を外部化して乳牛管理に重点を置いた経営とするため、哺育・育成業務を行う組織で、構成する酪農家の労働負担軽減を図ることを主な目的としています。

管内では個人での哺育・育成受入経営体も合わせて、7か所で組織されています。

#### ■哺育・育成センター設置状況（平成30年度）

区 分	哺育・育成 受託箇所数	利用戸数（戸）	頭数規模（頭）
オホーツク総合振興局	7	121	2,513
北海道	78	836	27,870

資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

# VI 農 産

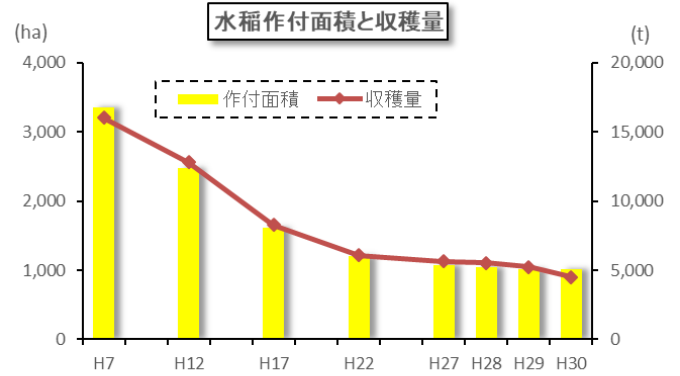
## 1 稲 作

昭和初期には20,000haを超えていた管内の水稻作付面積は、昭和45年以降の生産調整や冷害等の影響により他作物への転換が進んだことから大きく減少し、近年の作付面積は約1,000haとなっています。

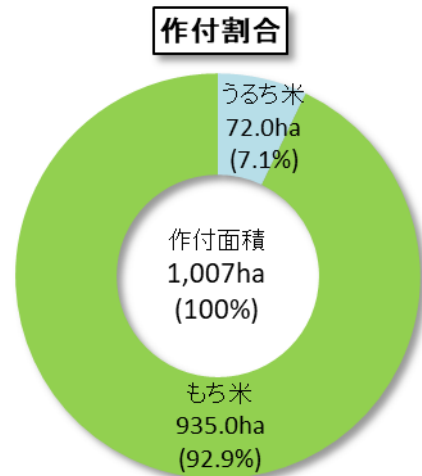
平成30年産の作付面積は、1,010haとなり、作柄については、4月～5月の高温傾向により初期生育は良好となりましたが、6月の低温・寡照傾向により分けつが遅れたため、茎数は平年より少なくなり、8月も低温傾向にあったため登熟が遅れました。千粒重は平年並みでしたが、稔実割合は平年より低く、穂数及び総粒数も平年を下回りました。オホーツク地区の作況指数は「91」となり、全道平均(90)を上回りましたが、前年の105を下回る結果となりました。

オホーツク地域は、水稻生育上、厳しい気象条件であることから、作付はもち米が主体であり、もち・うるちの割合は、30年産でもち米が92.9%、うるち米が7.1%となりました。

もち米の品種は、平成21年に北海道優良品種に認定された耐冷性に優れる「きたゆきもち」にほぼ全面的に切り替わり、生産量は道内一となっています。



資料：農林水産省「作物統計調査」



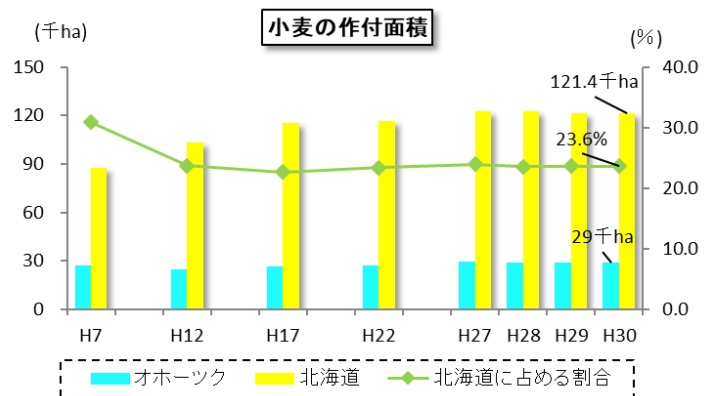
資料：北海道農政部調べ

## 2 畑 作

### (1) 麦類

小麦は、輪作体系上の基幹作物となっており、平成30年産の作付面積は、29,000haとほぼ横ばいで推移していますが、春まき小麦の作付面積は、平成22年産から微増となっています。

平成30年産の生育状況は、4月に入ってから好天の日が多く、初期生育は順調に推移したものの、6月の出穂以降の多雨・寡照により生育はやや停滞し、また、収穫作業は降雨の影響により平年よりやや遅れて終了しました。



資料：農林水産省「作物統計調査」

秋まき小麦では穂数は多かったものの、粒数・千粒重が平年を下回り、小麦全体では、10a 当たりの収量は 458kg、収穫量は 132,800t となりました。

### ○秋まき小麦

平成 30 年産の作付面積は 24,100ha となり、前年に比べて 700ha の増加となりましたが、収穫量は 121,000t と、前年に比べ面積は 3,000t の減少となりました。10a 当たりの収量は 503kg と全道平均(421kg)を上回りましたが、前年の 529kg を下回りました。

品種は日本めん用の「きたほなみ」が主であり、一部地域では超強力系小麦の「ゆめちから」も作付けされています。検査等級は 1 等比率がそれぞれ 83.9%と 77.4%となっています。

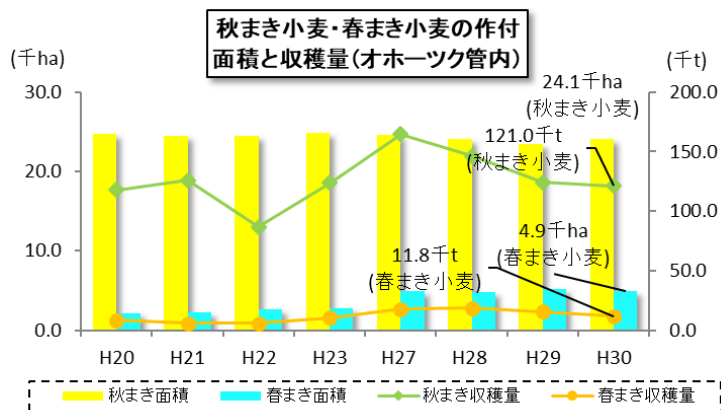
### ○春まき小麦

平成 30 年産の作付面積は 4,920ha で、前年に比べて 300ha 減少しました。収穫期の降雨等により収穫量は 11,800t と、前年に比べ 3,900t の減少、10a 当たりの収量は 240kg でした。検査等級はほぼ全量が 2 等以下となり、前年に比べ大幅に低下しました。品種は「春よ恋」が主で、パン・中華めん用として実需者からの引き合いが強く、北見地域及び斜網地域を中心に作付けされています。

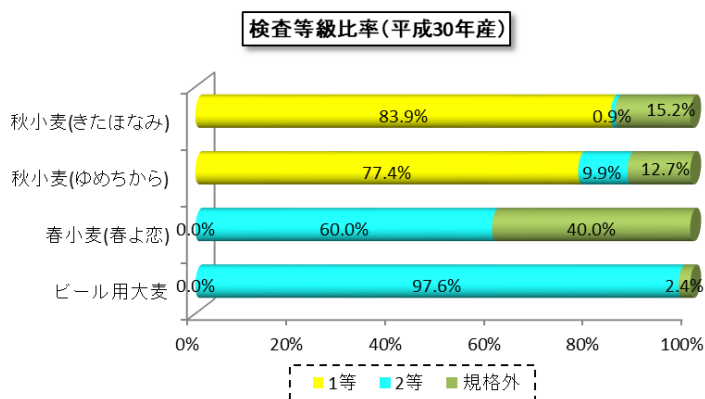
### ○大麦

平成 30 年産の大麦の作付面積は 1,190ha と、前年から 90ha 減少しましたが、10a 当たり収量は 349kg となり、前年を上回りました。

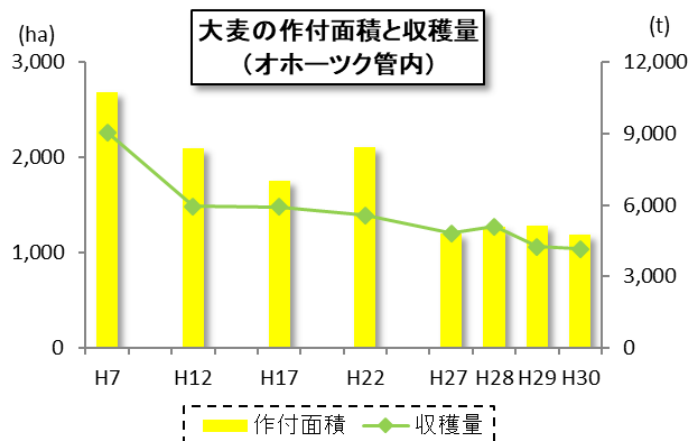
管内では、ビールの原料となる二条大麦が作付けされており、ほぼ全量が契約栽培となっています。北海道全体の約 7 割がオホーツク管内で作付けされており、品種は「りょうふう」が主力となっていますが、「札幌 2 号」の作付も始まっています。



資料：農林水産省「作物統計調査」



資料：オホーツク総合振興局農務課調べ



資料：農林水産省「作物統計調査」

## (2) 馬鈴しょ

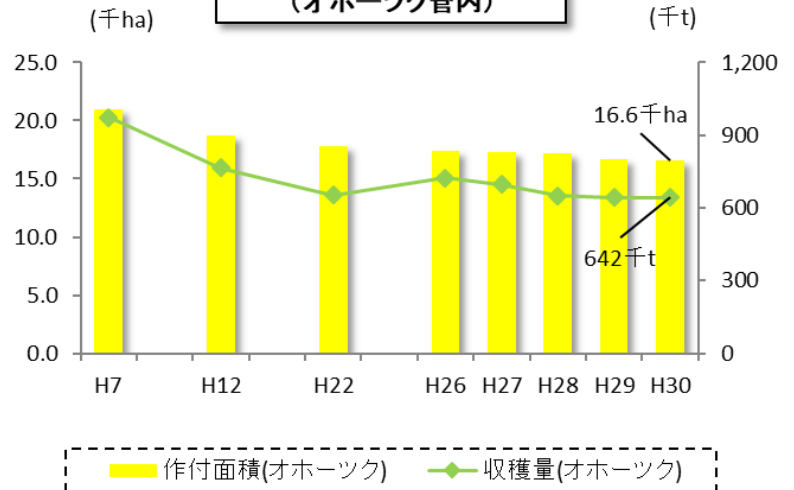
馬鈴しょは、畑作の基幹的な輪作作物となっており、平成 30 年産の作付面積は 16,600ha、収穫量は 64 万 2000t と前年に比べ、作付面積が 100ha、収穫量は約 2 万 t 減少しました。作付面積は全道の 3 割を占め、十勝地方に次ぐ規模となっています。

用途別では、でん粉原料用が約 6 割を占めており、主に斜網地域で作付けされています。生食用と加工食品用は主に北見地域で作付けされています。

馬鈴しょの生産に重大な影響を与える害虫である「ジャガイモシストセンチュウ」は、昭和 52 年にオホーツク管内で初めて確認されて以降、発生地域は徐々に広がっており、平成 30 年度末時点で、管内 8 市町において発生が確認されています。

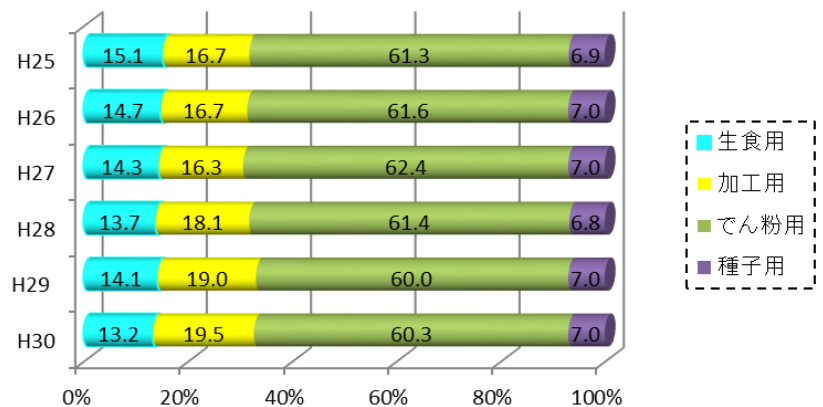
また、平成 27 年に網走市で国内初となる「ジャガイモシロシストセンチュウ」の発生が確認され、農林水産省は平成 28 年 10 月から、植物防疫法に基づく緊急防除を実施することとしました。平成 29 年からは、土壌消毒と対抗植物の植栽を組み合わせた防除対策を、関係機関と連携のうえ本格実施しています。

馬鈴しょの作付面積と収穫量  
(オホーツク管内)



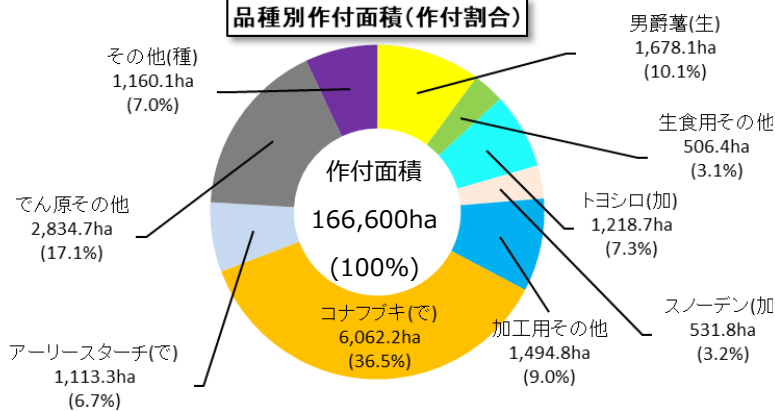
資料：農林水産省「作物統計調査」

用途別作付面積割合(オホーツク管内)



資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

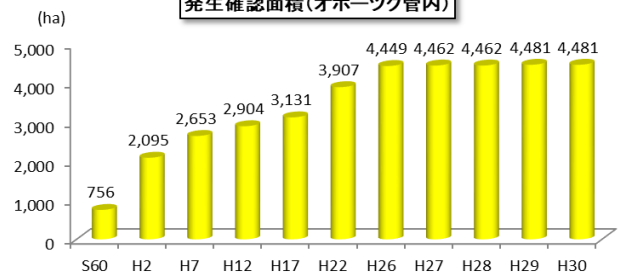
品種別作付面積(作付割合)



資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

注) (生) 生食用、(加) 加工用、(で) でん粉原料用、(種) 種子用

ジャガイモシストセンチュウの発生確認面積(オホーツク管内)



資料：北海道病害虫防除所調べ

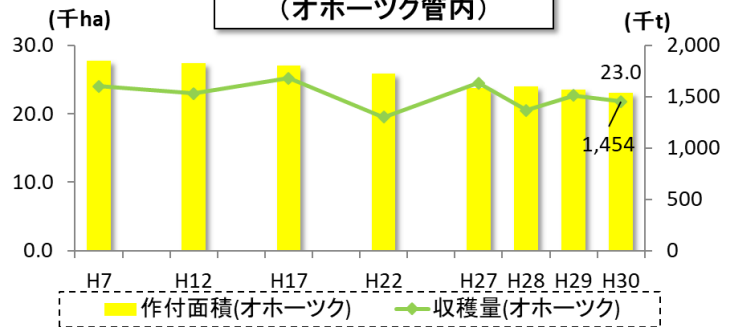
### (3) てん菜

砂糖の原料となるてん菜は、畑作の基幹的な輪作作物となっており、平成30年産の作付面積は23,000haと前年に比べ500ha減少し、収穫量も145万tと前年に比べ5万5,000tの減収となりました。作付面積は全道の約4割で、十勝管内に次ぐ規模となっています。10a当たり収量は6,332kg/10aと前年に比べ92kg/10a減少しましたが、根部糖分については17.1%と前年産と同値になりました。

品種は製糖工場の集荷区域によって異なりますが、高糖分・病害虫抵抗性の品種の作付比率が高くなっています。

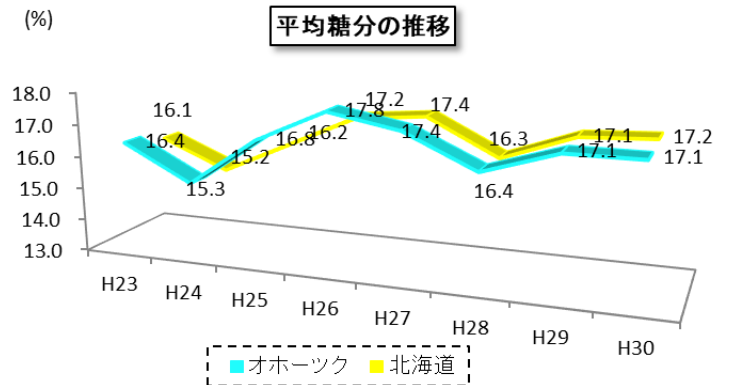
てん菜の栽培方法のうち直播栽培については、移植栽培と比べて収量が劣るというデメリットがありますが、作業の軽減は図られる栽培方法であることから、経営規模の拡大、栽培技術の改良などにより徐々に面積が拡大しています。平成30年には管内のてん菜作付面積の14.6%が直播栽培となっています。

てん菜の作付面積と収穫量  
(オホーツク管内)



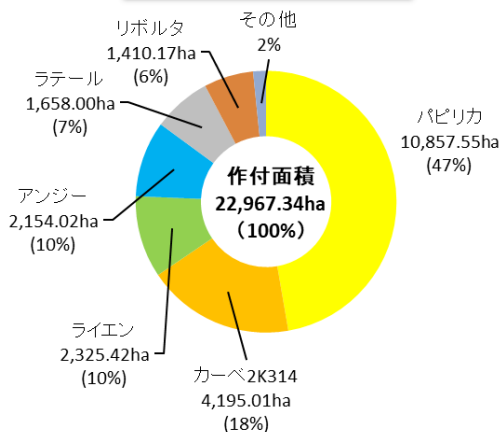
資料：農林水産省統計部「作物統計」

平均糖分の推移



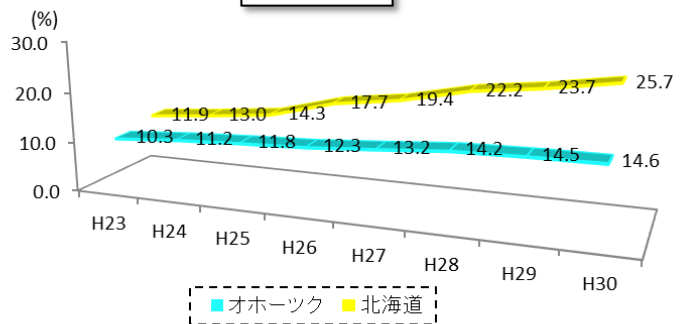
資料：北海道農政庁生産振興局農産振興課「平成30年産てん菜生産実績」

管内てん菜の品種別作付割合



資料：北海道農政庁生産振興局農産振興課「平成30年産てん菜品種別作付面積」  
品種別面積は作付統計調査と一致しない。

直播率の推移



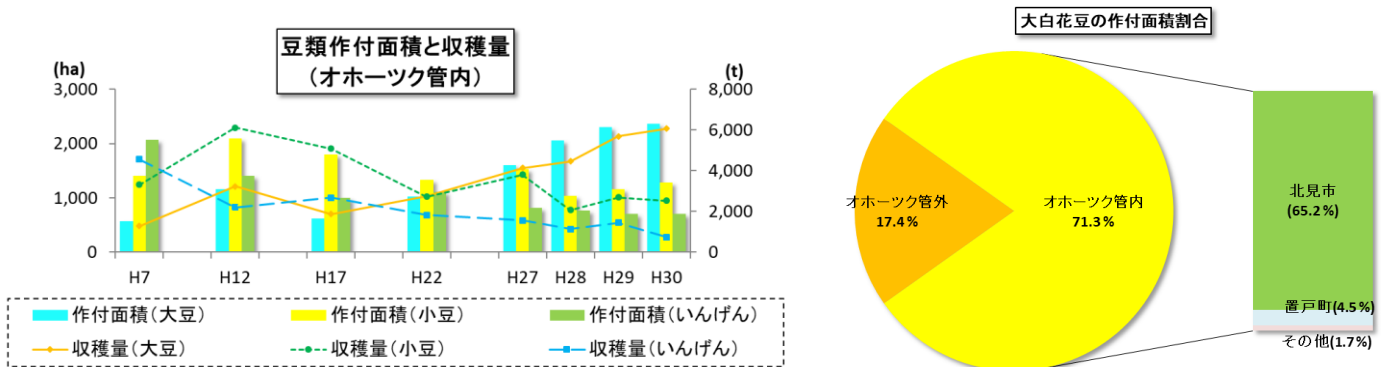
資料：北海道農政庁生産振興局農産振興課「平成30年産てん菜生産実績」



#### (4) 豆類

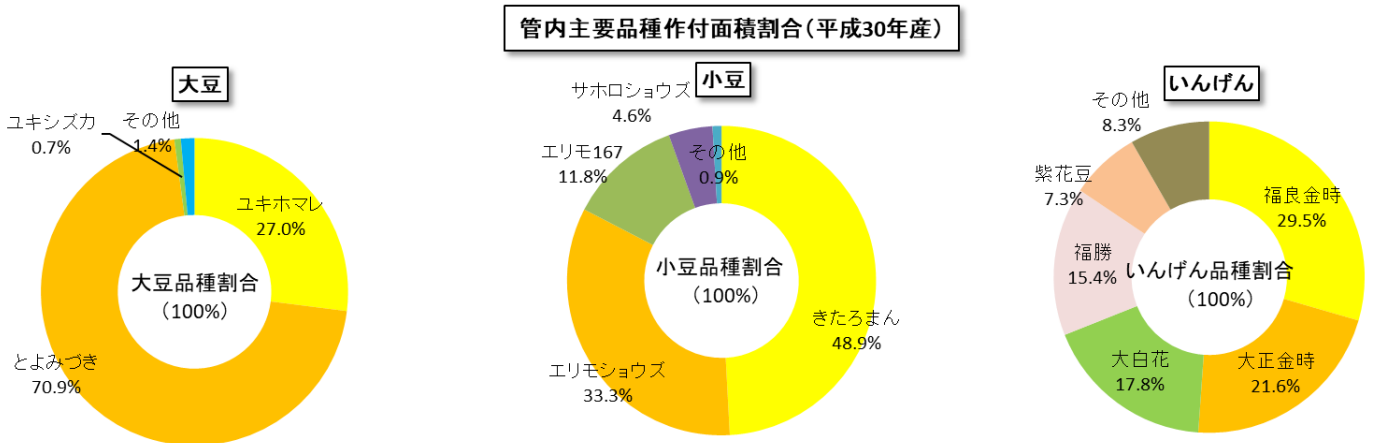
大豆を含む豆類は、適正な輪作体系を維持する上で重要な作物となっています。冷涼な気候のオホーツク管内では収量が不安定であったため、作柄が安定している小麦等に転換されてきましたが、管内に適した大豆品種が育成されたことなどにより作付が増えつつあり、平成30年産の大豆の作付面積は約2,400haとなっています。10a当たり収量は256kgと、全道平均(205kg)を上回っています。

オホーツク管内におけるいんげんの作付面積は全道の約1割となっています。このうち、高級菜豆である花豆(大白花)は、主に北見市において生産されており、全道の作付面積の71%を占め、全道一の産地となっています。



資料：大豆は農林水産省「作物統計調査」、小豆・いんげんは平成18年産までは「作物統計調査」、平成18年産以降はオホーツク総合振興局調べ

資料：オホーツク総合振興局農務課調べ  
市町村の括弧内は全道作付面積に対する割合



資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

### 3 園 芸

#### (1) 野菜

野菜類は、高収益作物として各地域で農業経営の中に取り入れられており、管内の平成30年産の作付面積は10,167haとなっています。

作付割合は、たまねぎなどの葉茎菜類が70.5%、にんじんなどの根菜類が14.5%、スイートコーンやかぼちゃなどの果菜類が12.3%、メロンなどの果実的野菜類が0.1%となっています。

また、品目別の作付面積は、たまねぎが最も多く7,172haと全体の70.5%を占めており、次いでにんじん1,102ha、スイートコーン734ha、かぼちゃ513haとなっています。

地域別の作付面積では、北見市、訓子府町などの北見地域ではたまねぎ、湧別町、佐呂間町などの東紋・西紋地域ではかぼちゃ、斜里町、美幌町などの斜網地域ではにんじが多く、地域の特性を活かした産地が形成されています。

管内野菜作付面積と収穫量

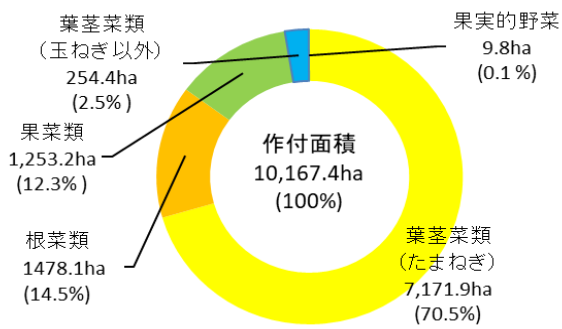
	作付面積 (ha)			収穫量 (t)		
	H29	H30	前年比 (%)	H29	H30	前年比 (%)
たまねぎ	7,237.8	7,171.9	99.1	422,406.1	390,612.8	92.5
はくさい	35.0	30.4	86.9	1,917.6	1,857.4	96.9
キャベツ	64.7	59.3	91.7	3,689.6	3,269.0	88.6
アスパラガス	48.7	42.5	87.3	104.8	104.4	99.6
ブロッコリー	83.3	82.9	99.5	599.1	592.0	98.8
ほうれんそう	5.9	6.2	105.1	144.8	82.1	56.7
レタス	19.9	4.3	21.6	99.8	37.0	37.1
ねぎ	8.3	9.5	114.5	269.1	180.2	67.0
その他 <sup>1)</sup>	15.6	19.3	123.7	109.0	131.4	120.6
<b>葉茎菜類計</b>	<b>7,519.2</b>	<b>7,426.3</b>	<b>98.8</b>	<b>429,339.9</b>	<b>396,866.3</b>	<b>92.4</b>
スイートコーン	706.9	733.9	103.8	8,585.3	7,340.8	85.5
かぼちゃ	555.8	512.9	92.3	9,198.0	5,145.4	55.9
その他 <sup>2)</sup>	13.6	6.4	47.1	225.0	196.3	87.2
<b>果菜類計</b>	<b>1,276.3</b>	<b>1,253.2</b>	<b>98.2</b>	<b>18,008.3</b>	<b>12,682.5</b>	<b>70.4</b>
にんじん	1,169.6	1,102.0	94.2	45,537.8	41,139.6	90.3
だいこん	94.7	83.0	87.6	3,658.2	2,018.7	55.2
ごぼう	124.1	146.4	118.0	3,215.1	2,819.7	87.7
ながいも	147.2	141.8	96.3	1,565.3	2,270.2	145.0
かぶ	11.7	4.9	41.9	0.0	156.0	-
<b>根菜類計</b>	<b>1,547.3</b>	<b>1,478.1</b>	<b>95.5</b>	<b>53,976.4</b>	<b>48,404.2</b>	<b>89.7</b>
<b>果実的野菜計<sup>3)</sup></b>	<b>10.0</b>	<b>9.8</b>	<b>98.0</b>	<b>204.8</b>	<b>181.0</b>	<b>88.4</b>
<b>その他野菜<sup>4)</sup></b>	<b>0.0</b>	<b>0.0</b>	<b>0.0</b>	<b>0.0</b>	<b>0.0</b>	<b>0.0</b>
<b>野菜計</b>	<b>10,352.8</b>	<b>10,167.4</b>	<b>98.2</b>	<b>501,529.4</b>	<b>458,134.0</b>	<b>91.3</b>

資料：北海道農政部「主要野菜作付実態調査」

注1)こまつな、にら、にんにく 2)トマト、ピーマン、さやいんげん、さやえんどう、えだまめ

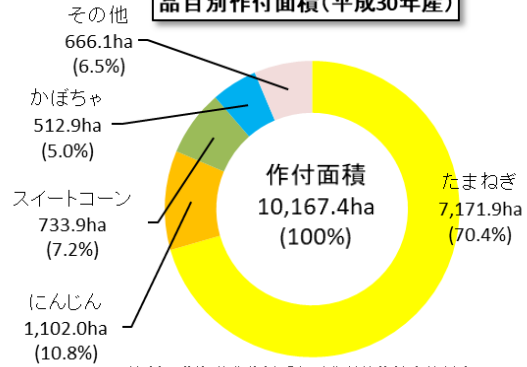
3)いちご、スイカ、メロン 4)ゆりね

管内野菜類別作付割合(平成30年産)



資料：北海道農政部「主要野菜作付実態調査」

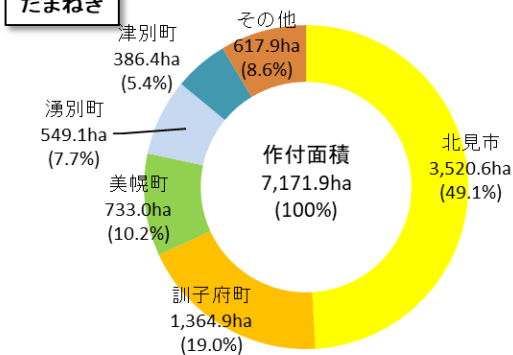
品目別作付面積(平成30年産)



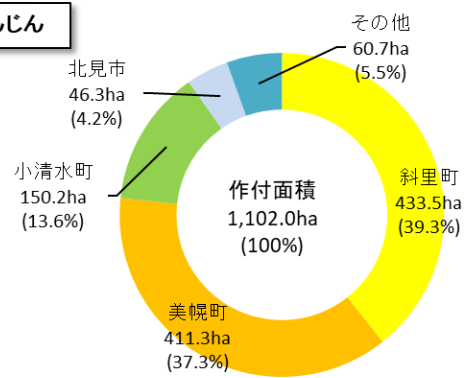
資料：北海道農政部「主要農野菜作付実態調査」

管内主要野菜市町村別作付割合(平成30年産)

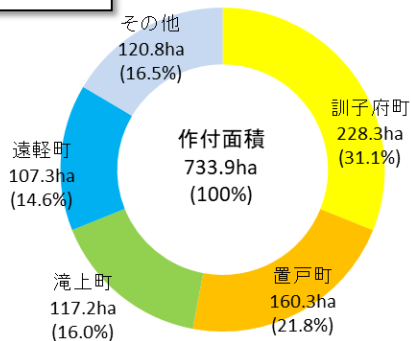
たまねぎ



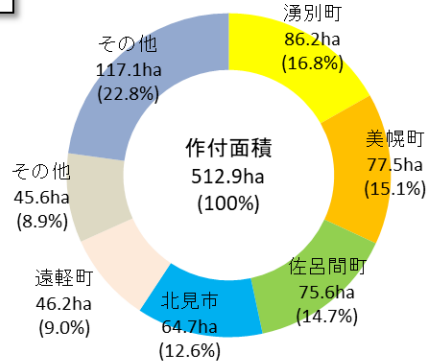
にんじん



スイートコーン



かぼちゃ

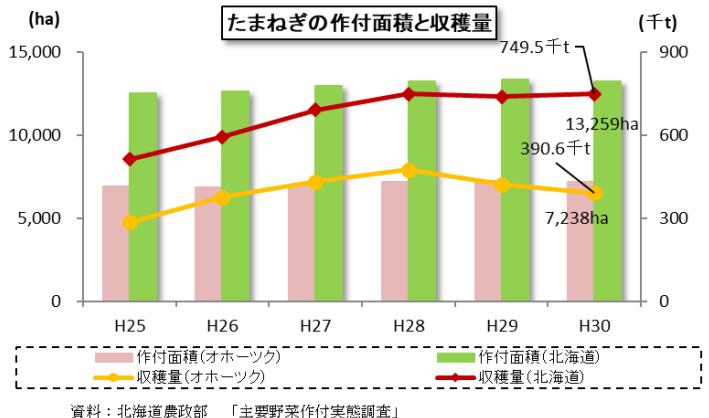


資料：北海道農政部「主要野菜作付実態調査」  
※本表は四捨五入により合計値と内訳が合致しないことがある。

○ たまねぎ

たまねぎの栽培について、昭和40年代に作業の機械化が確立して以降、収益性の高さから生産者の作付け意欲は高く、全道の作付面積の約54%を占める全道一の産地となっています。

また、各産地ではより安定した生産を目指し、産地での一次加工による高付加価値化、実需者ニーズに対応した契約取引の推進、集出荷体制の効率化など、産地強化に取り組んでいます。



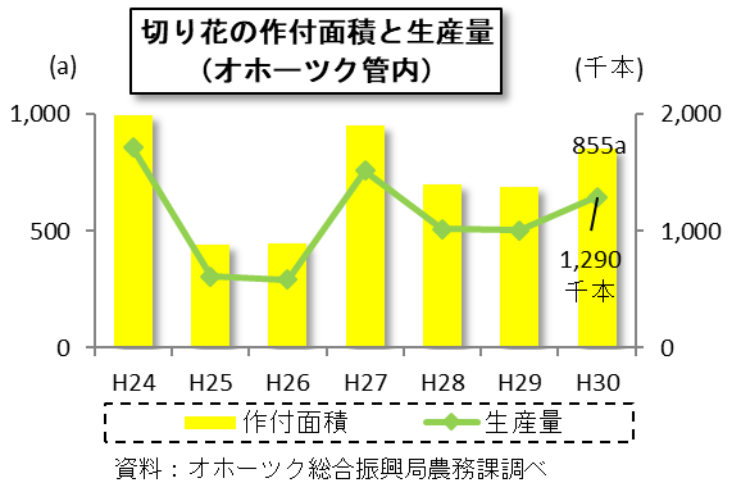
資料：北海道農政部「主要野菜作付実態調査」

## (2) 花き

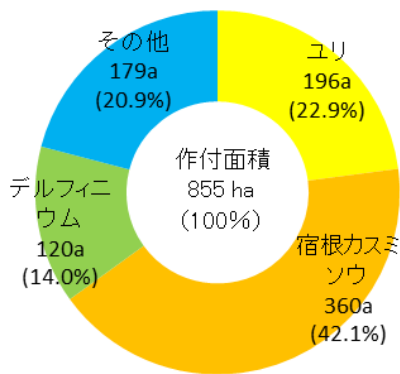
管内では、冷涼な気候を活かした花き生産が各地で行われています。切り花の生産面積は大空町が管内の57%を占めており、その他には、小清水町、美幌町、斜里町、北見市、津別町、清里町でも生産されています。また、花木類も一部市町村で栽培が行われています。

平成30年の切り花の作付面積は855aで、宿根カスミソウ、ユリ、デルフィニウム、カラーで管内の約9割を占めています。

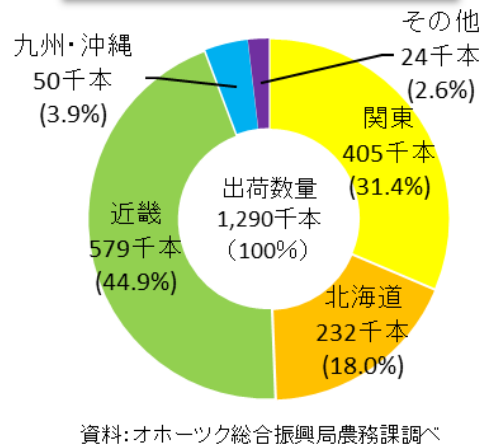
出荷先は、道内が18.0%を占めており、道外については、関東圏に31.4%、近畿圏に44.9%、九州・沖縄圏に3.9%、その他2.6%となっています。



**切り花の品目別作付面積 (オホーツク管内 平成30年産)**



**切り花の出荷先割合 (オホーツク管内 平成30年産)**



## (3) 果実

管内では、りんご、ぶどう、おうとう（さくらんぼ）などが栽培されており、主な産地としては、りんごとおうとうは北見市や網走市、ぶどうは北見市や置戸町となっています。

果樹園の中には、収穫体験ができる観光農園もあり、オホーツク管内における観光資源の一つとなっています。

#### (4) 特用作物等

管内では、古くから冷涼な気候を活かし、青しそ、はっか、センキュウ、トウキなどの特用作物や、わさびだいこん（西洋わさび）など特色ある作物を栽培しています。

はっかは、開拓期から生産され、昭和 10 年代には世界の 80%のシェア

を占めていましたが、合成はっかの登場などにより、作付面積は大きく減少しています。近年は、漢方薬の原料や加工食品へのげんりょうとしての需要が高まっていることから、契約栽培による安定収入を期待して、はっかを見直す動きもあります。

青しそは、香料会社との契約により北見市や遠軽町を主に栽培されており、しそ油として出荷されています。

センキュウ・トウキなどの薬用作物は、網走市、湧別町を主に、生薬会社との契約栽培が行われているほか、わさびだいこんは、一部地域で栽培されており、網走市内の加工場に出荷されています。

特用作物等の作付面積（平成30年、2ha以上）

品 目	作付面積 (ha)	作付市町村
センキュウ	17.8	網走市
トウキ	4.9	網走市、湧別町
しそ	102.3	北見市、佐呂間町、遠軽町
和種はっか	2.2	滝上町口

資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

# VI 酪農・畜産

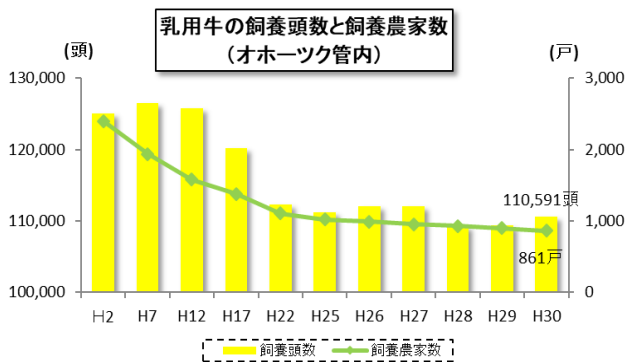
## 1 酪農

### (1) 乳用牛

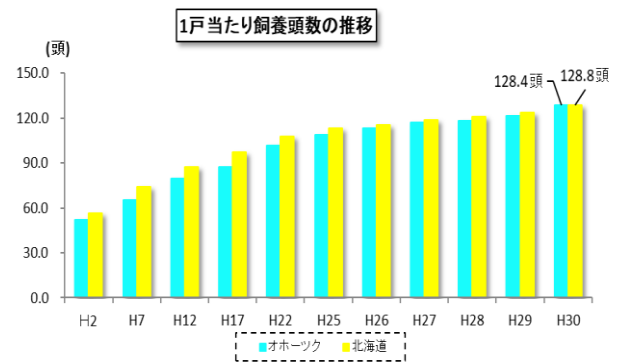
平成30年の管内の飼育戸数は861戸となり年々減少していますが、飼養頭数は11万591頭と近年横ばいで推移していることから、1戸当たりの飼養頭数は年々増加し、規模拡大が進んでいます。

規模拡大に伴う労働過重や担い手の減少等の課題に対応するため、搾乳ロボットなどの省力化機械の導入、酪農ヘルパーやコントラクター、TMRセンター、哺育・育成センター等の営農支援システムの整備を進めるなど、ゆとりある酪農経営を実現する取組がすすめられています。

特に、近年、搾乳ロボットは省力化の面から導入が進んでおり、管内では平成31年2月現在、44戸（道農政部調べ）で利用されています。



資料：農林水産省「畜産統計調査」  
ただし、H2以降については、オホーツク総合振興局農務課調べ

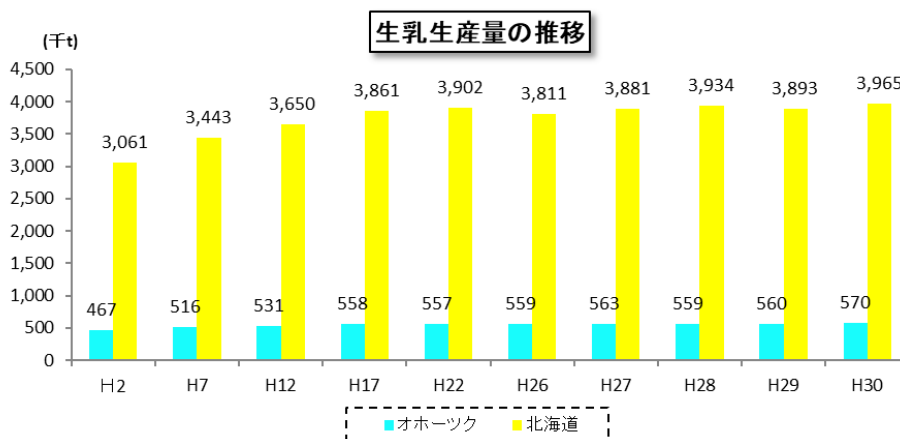


資料：農林水産省「畜産統計調査」  
ただし、H2以降のオホーツクについては、オホーツク総合振興局農務課調べ

### (2) 生乳

平成30年の管内の生乳生産量は、全道の14.4%を占める56万9千750tとなり、前年対比では101.7%となりました。

安全・安心な生乳を提供するため、生産者や農協、乳業メーカー等の関係者により、良質乳の生産に積極的に取り組んでおり、体細胞数や生菌数は低い水準を維持しています。



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計調査」  
ただし、オホーツクについては、ホクレン北見支所の受託乳量